



5 長ぐつをはいたネコ (フランス/ペローの昔ばなし)

「ご主人、わたしに長ぐつを一足あつらえてください」

一匹のネコしか財産にもらえず、途方にくれていた3人兄弟の末っ子に、そのネコはいました。

ネコは、長ぐつをはき、森でえものをつかまえると、王さまのところへいきました。

ネコは、末っ子のことをカラバ侯爵とふれこみ、えものを侯爵からのおくりものとして、王さまにささげました。

ある日、ネコはお金持ちのオニが住む城にいき、オニにむかっていたいました。「オニさんはどんな動物にでも変身できるそうですね。

でも、まさかネズミのような小さな動物にはなれますまい」「わけもない。いま見せてやる」オニはたちまちネズミに変身し、

床をチョロチョロと走り回りました。すかさずネコはネズミにとびかかり、ペロリと食べてしまい、

その城に主人のカラバ侯爵を住ませました。そこへ、王さまが、美しいお姫さまをつれてとおりにかかりました。

ネコは王さまにいました。「王さま、お待ちしておりました。わたしの主人、カラバ侯爵の城へどうぞ」

お城に案内された王さまとお姫さまは、すっかりネコとカラバ侯爵のことが気に入りました。

その後、侯爵とお姫さまは結婚して、ずっとしあわせにくらしましたとき。

ネコの知恵が、しあわせをまねきました。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

●ネコと人の関係にもお国柄あり。

ネコが人に飼われるようになったのは、およそ5千年前のエジプト。もとは北アフリカに住んでいた野生のリビアヤマネコが、エジプトでペット化され、小アジア、ヨーロッパを経て、世界各地に広まったといえます。日本には、仏教伝来の頃、船に積んだ経典をネズミから守るために一緒に乗せられてきたそうです。瞳のかたちが様々に変化することから、エジプトでは太陽を司る神聖な動物、インドでは月の神とされたネコも、同じ理由で中世ヨーロッパでは魔女の使いとされ、恐れられたとか。日本では、東京世田谷・豪徳寺の「大雨に降られた大名を寺のネコが手招きし、その後、寺が裕福になった」という招き猫伝説をはじめ、かしこいネコが飼い主に恩返しする話が各地に残っています。「長ぐつをはいたネコ」は、日本にもいたのでしょか。

●ネコはどうして長ぐつをはいた？

このお話、題名が「長ぐつをはいたネコ」。でも、「長ぐつ」が登場する場面はほとんどありません。なぜ、ネコは長ぐつをはいているのか。昔ばなしの世界では、「衣装が変わると性質も変わる」という特徴があります。物語のネコは、長ぐつをはいたとたん、2本足で歩き出します。その姿はまるで人間のようなのですが、ネズミを食べるところなどはネコそのものです。長ぐつは、「ネコ」でも「人間」でもない不思議な力をもった存在になるための条件だったと考えられます。では、なぜ「くつ」ではなく「長ぐつ」

なのでしょう。長ぐつの歴史をみると、絵画に描かれる古代ギリシャの神々がはいているのは「エンドロミス」という長ぐつ。古代ローマの「カンバグス」は、つま先のない長ぐつで、長さが階級を表し、最も長いものは皇帝がはいたといわれています。これは、中世ヨーロッパでもぜいたくな長ぐつとされています。もしかすると、このような高貴なイメージを、長ぐつをはくネコの姿に反映させているのかもしれない。

●ネコの狩りは頭脳プレー。

ネコの身体には、狩りをするための知恵がたくさんつまっています。たとえば耳。高周波の音を聞く能力は、人間の1万8千ヘルツに対し、なんと6万ヘルツもの超音波が聞こえるほど。人間には聞こえないネズミの高い声にも敏感に反応します。また、暗いところでもよく見えるのは、網膜の裏側に「タペタム」と呼ばれる反射板があるため。この反射板が外から入る光を反射することで、網膜の視神経が何度も刺激されるのです。夜、ネコの目が光るのもこのためです。ところで、物語のネコですが、つねに先回りをして、たくみに王さまをだましています。じつはこれもネコならではの狩りの行動。ネコの狩りは潜伏型。じっと身をひそめてえものを待ちます。また、えもの行動を予測して、先回りすることも実際にあるとか。どうやら王さまは格好のえものだったようですね。

昔ばなし監修/白百合女子大学教授 小澤俊夫
取材協力/動物ライター 加藤由子